

# 教育実習を終えての反省と課題 －教案との関係に焦点を当てて－

日本語教育学講座博士後期課程3年  
飯田香織

## 1. タスクの難易度

実習のために作成した教案を見直してみると、自分のセリフや時間ごとにどんなタスクを行うか等は事細かに書いてあった。そして、学習者に投げた質問がどのように返ってくるか、どんな質問を聞かれるか等も予想して記載してあった。たとえば、折れ線グラフについてのタスクでは、そのグラフが何を表しているか、またそれぞれの線が何を示しているかをグループで話し合ってから、学習者に当てるといった構成であった。教案を作成している時には、折れ線グラフについてのそれらの質問を学習者に問えば、グループで既に話し合っているのだから、答えられるものと推測していた。しかし、実際の授業では、学習者のレベルが統一されていないため、そのグラフについてお互いに話し合うということ自体成り立っていなかった。日本人（TA、実習生）がグループに入ってサポートしても、そのタスクについて話し合うところまで到達しなかった。学習者はまず、折れ線グラフに書かれた漢字（英訳は付いていた）につまずいて、困惑しているかのように見えた。そして、これまではアカデミックなタスクを行っていなかったもので、突然なぜ折れ線グラフが出てきたのか、それも理解出来ないといった表情をしている学習者もいた。確かに、タスクはタスクに違いないのだけれど、事前に今日はアカデミックな題材を使うということを説明したり、英語のみで書かれた折れ線グラフと日本語の折れ線グラフを比較したりするなどして、日本語で書かれてはいるけれど、図のタイトルや折れ線グラフが表している内容などを日本語で言うことが出来れば、それほど難しいタスクではないということを示すべく示すべきだったかもしれない。もしくは、その説明の時間をもっと長く作って、例を上げながら、全体で練習するなどの導入が必要であったかもしれない。

## 2. 授業と教案について

私は「比較、理由を述べる」という学習項目を担当した。学習者の出身国、その国で有名な食べもの、観光地などをカラーの写真で準備した。また、日本の食べものや観光地の写真もいくつか用意した。それらは、学習者の興味を惹くものと考えられた。確かに、「どんな食べ物が好きですか？」という質問や「～さんの国で一番おいしい食べものは何ですか？」などの質問は、どの学習者にとっても興味を惹くものであったようだ。しかし、問題は何かを比べたいとき、それが2つもしくは3つのときにどんな文型を使えば良いのかという

導入部分を、実習生である自分が始めに殆ど全て説明してしまった点である。よって、「学習者側から引き出す」という重要な点が抜け落ちていた。これは、実際のクラスで緊張して焦ってしまったということが原因ではなく、教案作成の段階から良く考えられていなかった点であった。「学習者側から引き出す」ことは、学習者自身が自律的に考えていく上で、大切なことであるため、この点が抜けていたのは問題であった。教案作成の段階で、シナリオのように自分が話す点、学習者から返ってきそうな質問や答えを準備しておくのも大事だが、それ以前に、「学習項目の文型について、どう学習者側から引き出すか」という点についてじっくり考える時間を取り、実際の授業が単なる教師のデモンストレーションにならないように、気をつけなければならない。

### 3. 学習者と教案について

今回、実習にレギュラーで参加された学習者は5～6名であった（日や時間によって減ったり増えたりした）。だいたいレベルや苦手な項目などは、一度目のクラスで把握出来た。マーキングリストでも、実習生同士で情報をやり取り出来たのが幸いだった。そこで、教案を作成するためにそれらの学習者の情報を取り入れるということをするれば良かったのだが、実際はそこまで気が回らなかった。たとえば、教案には、自分が質問する内容と学習者の誰かが答えるであろう答えや質問が書いてはあるのだが、誰に当てるか、どのように当てるか（ひとりずつ順に当てる、ランダムに当てる等）までは書かれていなかった。そのせいか、いつも質問に答える学習者が偏ってしまうことや、質問する前に答えてしまう学習者が決まって来てしまって、常にあまり答えない学習者や答えられるのに答えない学習者というような学習者の役割のようなものが、少ない人数（学習者）の中で、いつの間にか出来上がってしまっていた。これは、出来れば避けたい事態であった。だが、TA やペアで組んでいた実習生の久野さんのサポートのおかげで、ぜんぜんついて来られない学習者は出てこなかったし、学習者間でのサポートもかなり良く出来ていたため、お互い日本語で教えあったりして、理解を深めていた点は良かった。

### 4. 発表と教案について

今回の実習では、「10年後の自分」について発表するというクラスがあった。そのクラスを担当した時、導入部分に取る時間が限られていたため、自分がまずデモンストレーションで10年後の自分について、ホワイトボードに時間軸と写真を付けながら発表するというやり方で学習者に示した。学習者は発表時に、それらの導入を良く理解出来ていて、全員が楽しく発表できていた。しかし、いくら限られた導入部分であったとしても、やはり重要なのは学習者が「日本語でこんなことが言いたい」「こんなことが言いたいけれど、どんな日本語で言ったらいいのだろう」という気持ちにさせることであるので、この反省を今後の日本語指導に生かしたい。